

Title	理想主義者Brutus : 人間性の探索
Sub Title	Brutus, the idealist : An inquiry into human nature
Author	石川, 実(Ishikawa, Minoru)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1968
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.25, (1968. 3) ,p.200- 217
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	英語英文学・独語独文学特集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00250001-0200

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

理想主義者 Brutus

— 人間性の探索 —

石 川 実

現代人が絶えず過去に興味をもつ一つの理由として、人間性の本質は、文明の進歩とかかわりなく不変であるということが考えられよう。Sir Thomas North 訳の *Plutarch's Lives* から題材を得た *Julius Caesar* は、1599年に書かれ、Shakespeare 自身の所属していた the Lord Chamberlain's Men の力で、the Bankside に新装成ったばかりの劇場 the Globe で初演をみて以来、今日に到るまで熱心な観客を得ている⁽¹⁾。それはこの劇が、単に戯曲としての面白みを具えているばかりでなく、相連なる事件、対話、登場人物相互の応酬が一体となって、永劫不変の人間性を探索している為であろう。Shakespeare の技巧が単に紀元前44年当時のローマ史の焼直しではないといわれる所以でもある。

Julius Caesar は「人間の眼の届かぬ程に」高く高く^{あまがけ}天翔る孤高無比の勇者であった (I.i. 76—79)。その偉業は共和政治の終末と、君主政体の確立を約束し、民衆にとって Caesar は恰も神の如き存在であった。Shakespeare は、この世界最大の英雄が、その超人間的な意志と才能とを以ってしても、なお人間としての宿命を遁れ得ない姿に焦点をあてた。Caesar は既に Pompey に対し完全な勝利をおさめ、Caesar の恐るべき敵は悉く消え失せたのである。今や王冠を手にするだけで、Caesar に残された唯一の仕事であるから、行動する Caesar の姿は、もはや劇中にみられない。しかし Caesar の影はこの劇全篇を掩い、登場人物は悉く Caesar との関連においてのみ行動する。従ってこの劇を支配する要素は、

Caesar 乃至 Caesar の象徴するものであることはいうまでもない。この複合的な悲劇にあっては、Caesar を取巻く人物が、Caesar に劣らぬ重要性を帯びている。殊に Brutus の性格描写には、それまでの英国史劇にみられなかったモラルが基調とな⁽²⁾っている⁽²⁾ので、Brutus の人間像は、Shakespeare の人間観の発展過程に、重要な位置を占めていると考えられる。

Brutus は、徳義を重んじ、常に自分の行為の善悪という問題には触れるが、Cassius の如くその行為の結果を計算にいれない。こと正義に関する限り、己に対しては勿論、他人に対しても厳しく、友情や憐れみによる妥協を一切恕さない。人々の信頼に厚く、ストア哲学を実践する Brutus は内省的でその冥想には Hamlet の一面を偲ばせるものがある――

if I have veil'd my look,
I turn the trouble of my countenance
Merely upon myself. Vexed I am
Of late with passions of some difference,
Conceptions only proper to myself,
Which give some soil perhaps to my behaviours;

I. ii. 37—42

そして Cassius が Brutus の隠れた値打を映す鏡となり、国家の重大事件を示したいと申し出ると (I.ii.48—70) , Brutus のこの内省的な性格は反って均衡を崩す塚となり「Cassius という鏡」に映る虚像を実像と思いきみ、自己を見失なうことになる。適切な自我意識をもって自分の理想を調整できない Brutus の如き人物にとって、“honour” は恰好の罫となる。而して Brutus にとり “honour” とは公義への献身に外ならない――

What is it that you would impart to me?
If it be aught toward the general good,
Set honour in one eye and death i' the other,
And I will look on both indifferently;
For let the gods so speed me as I love
The name of honour more than I fear death.

I. ii. 84—89

如何に高遇な誉れある名義であっても、名義自体が実体以上の価値をもち得ないことを認識できなかつたところに、Brutus の悲劇がある。⁽³⁾従って Brutus は現実の Caesar に何ら個人的憤りをもたず、未だ曾て Caesar が感情に溺れて理性を失ったことを知らないのに、ローマの公益のためという名義のもと、「恐らく」という仮説に立って、人道に上ずることのできない「恐るべき事」を決意したのである。その論理は、現実を無視した大義名分論に外ならない (II. i. 28—34)。

Cassius のいう如く、高潔なる Brutus は、生来悪事には不向きであるが、その高遇なる稟性^{ひんせい}が、反って Brutus の瑕となり、現実には剛した実行力を麻痺してしまうのである。まこと高潔なる Brutus は高潔なる友とのみ交るべきなのだ。どんなに意志の強い人も誘惑には克てないのだから

Well, Brutus, thou art noble; yet, I see,
Thy honourable metal may be wrought
From that it is dispos'd: therefore 'tis meet
That noble minds keep ever with their likes;
For who so firm that cannot be seduced?

I. ii. 313—317⁽⁴⁾

Brutus が高潔なるがゆえに、そして万人の心に深く尊敬されているが故に、Caesar は Brutus の友情をいつくしみ、Cassius は Brutus を仲間誘うのである。終始 Brutus の高遇な稟性に訴えて誘う Cassius は、如何に高潔なる人間といえども、又如何に高い理性を以ってしても、誘惑には克てぬという確信のもとに、すべてを計算している——

O! he sits high in all the people's hearts:
And that which would appear offence in us,
His countenance, like richest alchemy,
Will change to virtue and to worthiness.

I. iii. 157—160

確かに高潔な Brutus にとり、Caesar 殺害を決意するまでの苦悶は、「怪しい幻か悪夢のよう」であった。そして極悪非道な悪事を企む Macbeth を想わせる程に心の均衡を失ったのである——⁽⁵⁾

Between the acting of a dreadful thing
And the first motion, all the interim is
Like a phantasma, or a hideous dream:
The genius and the mortal instruments
Are then in council; and the state of man,
Like to a little kingdom, suffers then
The nature of an insurrection.

II. i. 63—69

併しこれはあくまでも「恐い事を初めて思い立ってから、愈々それを実行する」ことを心に誓うまでの事であった。Brutus の決心とはその行為の実行に直結するからである。己の道徳律に絶対の確信をもち、何ら私心をはさまぬ Brutus は、自分に過誤があり得ぬと信ずるばかりに、一旦心に決めると迷いをもたず、懷疑のヴェールを剥ぐことができず最後まで苦悶に閉ざされる Hamlet と同、Duncan 王殺害後に初めて罪の恐怖に慄き、半ば自暴自棄に「悪を以って悪を強め」んとあがく Macbeth とも異なっている。「正直の甲冑にすっかり身を堅めている」Brutus にとって (IV. iii. 67)、Caesar 殺害は罪の意識を伴わぬ程に正当化されるのである。何故なら正義の人 Brutus が Caesar 暗殺の陰謀に加わるには、当然自己の良心に対しても、公衆の眼に対しても、充分納得のいく誉れある理由を見出した筈であるから。

Or else were this a savage spectacle.

III. i. 223

徳義と哲学とを以って己の生活を律する Brutus にとって、問題なのは現実ではなく、誉れある名義なのであった。換言すれば穏当派 Brutus は、過激政治家の義兄弟 Cassius と対照的で、絶えず理想の世界に生き、己の完璧を求め、他人の眼にも常に道義的に完全でありたいと願うばかりに、

己の行動については逐一釈明し続けなければやまない。では Brutus は Caesar 殺害を如何に弁明し得るであろうか。彼はローマの為に、自分の友を余儀なく犠牲として捧げねばならぬと信じたのである。従って Brutus は、この政治的暗殺行為を、私利私欲から離れた、純粋な宗教的犠牲の儀式にまで高めるのである。

現実をみるに鋭く、人の行為を腹の底まで見抜く Cassius (I. ii. 201—202) は、Caesar と共に、「油断のおけぬ策略家」Antony をも葬り去るべきだと主張するが、理想に生きる Brutus はこれに反対し、恨みを持った残忍な屠殺者とならず、神聖な犠牲を捧げる者として振舞うことを勧める。

Our course will seem too bloody, Caius Cassius,
To cut the head off and then hack the limbs,
Like wrath in death and envy afterwards;
For Antony is but a limb of Caesar.
Let us be sacrificers, but not butchers, Caius.
We all stand up against the spirit of Caesar;
And in the spirit of men there is no blood:
O! then that we could come by Caesar's spirit,
And not dismember Caesar. But, alas!
Caesar must bleed for it.

II. i. 162—171

ここで Brutus は、自らを高遇にして寛大なる理念の化身とみることに恍惚として、現実を忘れ「屠殺者とならず祭司となろう」と奇怪な提案をする。人間 Caesar に対してではなく、ただ Caesar の魂のみに歯向うのだというこの穏当派政治家は、残忍な屠殺行為の象徴としての血の連想を払拭しようとして、「人間の魂に血はない」と考える。にも拘らず、ローマの病魔を取除く為には、是非とも放血療法が必要であり、やむなく Caesar の血を放出しなければならないのだと嘆息をもらす。従って共犯者達を“gentle friends”と呼びかける Brutus は、残酷な行為を神聖化する

為に、殊更に現実から眼を逸らし、牽強附会の説を以って、誠に計り難い
結論をくだす——⁽⁸⁾

And, gentle friends,
Let's kill him boldly, but not wrathfully ;
Let's carve him as a dish fit for the gods ;
Not hew him as a carcass fit for hounds :
And let our hearts, as subtle masters do,
Stir up their servants to an act of rage,
And after seem to chide'em. This shall make
Our purpose necessary and not envious ;
Which so appearing to the common eyes,
We shall be call'd purgers, not murderers.

II. i. 171—180

「神に捧げる料理のつもりで力を揮おう」と説く理想主義者は、「手足という下僕を煽動して乱暴を働かせながら、後でそれを叱る振りをして」Caesar 殺害が「恨みの為でなく、必要に迫られて起ったものと考えられ」自分達が「屠殺者（殺人犯）でなく、改革者と呼ばれる」ようにと、甚だ得手勝手な希望を抱くのである。併し我々はここに絶えず世評を気にする「寛大な」Brutus の、哀れな姿を見る。つまりこの「寛大な」姿勢が、Antony を半ば嘲笑的に過小評価する結果を招くのである——

Alas ! good Cassius, do not think of him :
If he love Caesar, all that he can do
Is to himself, take thought and die for Caesar :
And that were much he should ; for he is given
To sports, to wildness, and much company.

II. i. 185—189

こうして自己の潔癖を過信する Brutus は、やがて Antony に Caesar の追悼演説を許すという、より重大な過失をおかし、遂には自ら身の破滅を招くのである。

Brutus の如き理想主義者にとって、名義名目の意義は大きく、それは屢々現実の姿を変えてしまう。Brutus の名義上の職務は、比喩的に祭司職ということになるが、Brutus はこの祭司としての使命感に迫られて、Caesar 殺害直後に、見るも無惨な「血の儀礼」(Blood ritual) を平然と執り行なうのである——

Stoop, Romans, stoop,
And let us bathe our hands in Caesar's blood
Up to the elbows, and besmear our swords:
Then walk we forth, even to the market-place;
And waving our red weapons o'er our heads,
Let's all cry, 'Peace, freedom, and liberty!'

III. i. 105—110

併し果してこの「血の儀礼」が犠牲と浄化の象徴的儀式と成り得たであろうか。否である。印象的な“Et tu Brute!”の言葉を残して、陰謀者達の前に鮮血に塗れて横たわる Caesar の姿は、神々に捧げる犠牲としてより、獵犬に与えるに相応しく(II. i. 173—174)、Brutus 一派の殺伐残忍な行為は蔽うべくもない。陰謀は漸く真実の姿を顕した。名義と実体、民衆の解放とその手段——それぞれを隔てる溝には、広く深く Caesar の血が鮮に流れている。犠牲の象徴として浴びた Caesar の血は、反って陰謀者達の罪の証^{あかし}となった。彼らは Caesar の犠牲の血が、自分達の血腥い行為の罪を蔽い隠してくれると信じて、両腕にも劍にも、惜しみなく Caesar の血を塗った。しかしその血は、大海の水悉くを以ってしても、決して洗い流すことのできぬ程、執拗に Macbeth の手に染みついた血痕にも等しいのである(Mac. II. ii. 60—64; V. i. 38—49)。

而して皮肉にも「この行為の責任を負う者は、それを実行したわれわれだけに止めたい」(III. i. 94—95)という、Brutus の言葉を裏書きしている。Antony の言う如く、Caesar の鮮血に染む陰謀者の姿は、恰も獲物を打とめたしるしを見せる獵師どもの如く、その行為の責任を認めなければならない⁽⁹⁾(III. i. 204—210)。

更にまた、これが実は Calphurnia の不吉な夢 (II. ii. 76—79) の具現であると同時に、Brutus の悲劇の宿命的瞬間でもある事に注目しなければならない。Calphurnia の夢に顛れた血を噴く Caesar の彫像と、Pompey の彫像下に鮮血をほとぼしらせて倒れた Caesar の現実の姿とを考えあわせた時、我々は、ローマの二大英雄 Pompey と Caesar とを連ねて、過去から未来へと循環する blood-imagery を容易に考えることができる。Pompey の血は Caesar に返ったのである。Pompey の血 (= 子孫) を砕いた Caesar (I. i. 56) は、遂には Pompey の彫像下に屈し、自らの血を流した。而して Caesar の血を塗る Brutus は、その瞬間に自らをこの歴史の周期に投じたのである。斯くてやがて Brutus 自身の血も、この流れに加えられなければならないのだ。更にコロサスの如く世界を跨ぐ Caesar (I. ii. 135)、北極星の如く不動の座を占め、オリムパスの山の如く泰然自若とした Caesar (III. i. 58—74) とは、生ける Caesar の彫像に外ならず、街角に飾られた Caesar の像、元老院の Pompey の彫像、そしてタークィンをローマから追放して、共和国の祖と仰がれる Brutus の祖先の像 (I. iii. 146; II. i. 53—54; II. ii. 85; III. ii. 55) と、様々の像に思いをめぐらす時、Pompey, Caesar, Brutus の宿命的な周期は、一連の statue-imagery によっても連なっていることが明かになる。

また Brutus は自らをローマの自由を護る解放者あるいは救世主と考えた (II. i. 56—58)。併し Caesar こそ、正に自らをローマの救世主と考えた第一人者ではなかったろうか。さもなくば、Calphurnia の夢を巧みに解釈して、Caesar の血こそローマ復活の吉兆と諂う Decius Brutus を、そんなにも容易に信じなかったであろう。Pompey も Caesar もそれぞれの時代の潮流にのって、自らをローマの解放者と任じたのである。

Decius の夢解釈は、「血は則ち生命力」という考えに基いている。併し Decius は「生命力」なる「血」を流すことが、実は生命を振り捨てることになる事を予期したであろうか。(11) それは「ローマの生命」を撒散らし混乱せしめる事に外ならない。そして Caesar の血は形見として貴人たちに尊ばれるのでなく、皮肉にも混乱に湧く民衆の、貴重な聖なる遺産となる

のだ——

Let but the commons hear this testament——
Which, Pardon me, I do not mean to read——
And they would go and kiss dead Caesar's wounds,
And dip their napkins in his sacred blood,
Yea, beg a hair of him for memory,
And, dying, mention it within their wills,
Bequeathing it as a rich legacy
Unto their issue.

III. ii. 136—143

「世界の中心」だった Caesar (III. i. 208) の貴い血は、ローマの「復活の血」ではなく、その流失は禍を呼び、世界は恐しい内乱に悩むのである。⁽¹²⁾ ——

Woe to the hand that shed this costly blood!
Over thy wounds now do I prophesy,
Which like dumb mouths do ope their ruby lips,
To beg the voice and utterance of my tongue,
A curse shall light upon the limbs of men;
Domestic fury and fierce civil strife
Shall cumber all the parts of Italy;

III. i. 258—264

而してこの禍は、新たなローマの解放者 Antony を生み、Brutus の血を呼ばずにはやまないのである。

Brutus は Caesar の血がすべてを奇蹟的に解決し、犠牲という唯一の魔術によって「自由」と「平和」とを擁護できると信じた。併し事實は悉く Brutus の予期に反した。Brutus 一派の斃^{たお}し得たものは Caesar の肉体のみであった。「Caesar の霊は地獄から来たばかりの復讐の女神を伴って、仇を求めて駆けめぐり、この国土の中に王の如く威だけ高に〈殺戮〉と叫び、飢饉、疫病、火災を獵犬の如く放つ」のである。

And Caesar's spirit, ranging for revenge,
With Ate by his side come hot from hell,
Shall in these confines with a monarch's voice
Cry 'Havoc!' and let slip the dogs of war;

III. i. 270—273

理想主義者が、誤った確信に囚われた時程恐しい結果を招く事はない。彼らにとって、名義乃至観念はひとつの現実であり、人間の生命が、単なる偶然でしかない時が訪れる。その時、彼らは抽象観念に支えられ、美しく同時に恐しい事を平然とやりのける。Brutus にとり、殺伐残忍な行為は、単なる外見に過ぎず、血腥い行為は手のみの仕業であり、心は憐れみに満ちているというのである。Caesar を愛し憐れみながらも、ローマを一層深く愛し憐れむばかりに、恰も火が火を消す如く、憐れみが憐れみを打消して、Caesar を斃したのだと弁明する Brutus は、さきに (II. i. 167—170) Caesar の肉体と精神とを分離して考えたが、ここでも「手」と「心」とを分離し、実は「手」が「心」の代行者である事を見落している。従って剣を執る腕は血腥く、敵を斃すに躊躇しないが、心は兄弟愛に柔らぎ、あらゆる友情と好意と尊敬とをもって Antony を歓迎する——

Our arms, in strength of malice, and our hearts
Of brothers' temper, do receive you in
With all kind love, good thoughts, and reverence.

III. i. 174—176⁽¹³⁾

併し Antony は Brutus 一派の血に染む^そ手に、残忍な血腥い罪の烙印を認め、とばしる血潮に哀感たかまり、我を忘れて Caesar を悼^{いた}み称^{たた}えるのである——

Had I as many eyes as thou hast wounds,
Weeping as fast as they stream forth thy blood,
It would become me better than to close
In terms of friendship with thine enemies.
Pardon me, Julius! Here wast thou bay'd, brave hart;

Here didst thou fall; and here thy hunters stand,
Sign'd in thy spoil, and crimson'd in thy leth.
O world! thou wast the forest to this hart;
And this, indeed, O world! the heart of thee.
How like a deer, stricken by many princes,
Dost thou here lie!

III. i. 200—210⁽¹⁴⁾

高まる感動に心を奪われたこの Antony が、たとえ Caesar の息子であっても、必ずや Brutus の理論を是認するであろうと考えた所に、理想主義者の宿命的な誤算があったのだ——

Our reasons are so full of good regard
That were you, Antony, the son of Caesar,
You should be satisfied.

III. i. 224—226

からくれないの血潮は、残忍な行為の象徴として Antony の涙を誘い、物いえぬ傷口は真赤な唇を開いて、滔々^{とうとう}と流れる Antony の弁舌を促し、民衆の心を激昂^{げきこう}させたのである (III. i. 259—262; 174—266)。Caesar の血は今や殉教者の聖なる血となり (III. ii. 138—139)、民衆の血を湧かし、その勢い Brutus 一派を焼き尽くすばかりとなった。「復讐だ！ かかれ！ 探せ！ 焼け！ 火をつけろ！ 殺せ！ 斃せ！ 叛逆人を一人も生かすな！」と渦巻く興奮のうちに叫ぶ民衆は (III. ii. 209—210)、「Caesar の遺骸を斎場で焼いて、その燃えさしで、叛逆者たちの家に火をつけよう」と颯起するのである (III. ii. 259—260)。

Maurice Charney は、「火」を二つの意味——パッション、血を湧かし燃えたつ情熱の力としての火と、破壊力と清浄力とをあわせもつ火——に分析して、fire-imagery を展開させ、この Antony の追悼演説の場面において、fire-imagery の二つの意義が、ひとつに融合した演技となっている事を述べている。Caesar の血に訴えた Antony の追悼演説は、民衆の感情 (= 血) を燃えたたせた。⁽¹⁵⁾そして Brutus は共和制を護ろうとする自

分達の情熱が清浄力をもつ聖火として、Caesar 専制の火を打ち消すと考えたが (I. iii. 107—111; III. i. 171), 反って Caesar 火葬の火が浄めの聖火となり、復讐の具として Brutus 一派を打ち滅すことになる (III. ii. 209—210, 258—264; V. v. 55)。而して破壊的な専制の火と考えられたものが、清浄力乃至肅正力を帯びるに至る原動力となったものが、則ち Caesar の血なのである。換言すれば、Caesar の血は、Brutus の考えたような犠牲の象徴としてでなく、むしろ殺戮^{きつりく}の象徴として復讐の火をかりたて、blood-imagery と fire-imagery も亦、この場面のみごとに統合されるのである。

そもそも血塗られた「真赤な武器」によって、平和と自由とを克ちとることができると考えた Brutus の予測は、全くの幻影であった (III. i. 105—110)。Brutus はこの幻影の為に、愛する友を、ローマを、そして自らをも欺いてしまった。併し Brutus は、悪党でも偽善者でもなかった。むしろ Brutus の stoicism が徳義を高揚し、その高邁なる人格が万人の鏡と仰がれたばかりに、Brutus はこの悲劇的な誤りを犯してしまったのである。⁽¹⁶⁾ Brutus に自画自讃の傾向があるとしても、その為に彼が無意識に Caesar を嫉^{そね}んだと考えたり、あるいは Brutus の動機の根元に我欲成就の願いが秘められており、その論理はすべて Caesar の死に対する、無意識の欲求を蔽う合理化⁽¹⁷⁾に外ならぬと考えるのは、あまりに穿った説といわねばならない。⁽¹⁸⁾ 又 Brutus が殊更に繰り返し “honesty” を主張するのも実は Brutus 自身の “honesty” に対する懐疑の顕れであるとみる J. I. M. Stewart の説も同類であろう。⁽¹⁹⁾ Brutus の動機に関する限り、心理的な詮索は無益であり、妥当ではない。Brutus の心は如何なる意味においても、誠実そのものであり、たとえその論理に不条理がみられるとしても、それは Brutus の動機に無意識ながら不純な我欲があるという証拠とはならない。陰謀者達の中であって、Brutus のみは憎しみを持たずに行動し、その意図に私心はなく、ただ国民全体の利益のみを考えたのである。(V. v. 68—72)、専制を断ち、より良き未来の為に立ち、Caesarism を打ち砕かんとした Brutus の断固とした自信は、己の予想がつぎつぎに覆されても

なお、一切の外部情勢に左右されぬストア主義⁽²⁰⁾に支えられ、不運な境地にあって最善に生きようとする努力を生んだ。而して Brutus は窮地^{おび}に怯えず、従容として運命に直面するのである——

O! that a man might know

The end of this day's business, ere it come;

But it sufficeth that the day will end,

And then the end is known.

(21)
V. i. 123—126

Brutus の場合、苦悩を通じて次第に人間性を高めるという過程はみられず、一面的には、その人格は終始一貫、陰謀に参画した当初の Brutus の姿が、そのまま悲劇の終末にもみられるといえる。Brutus の動機、主義主張、行動は全篇を通じて変らない。Brutus はローマの自由を護る為 Caesarism に立ち向ったのであるが、まさにその自由の為に、遂には自らの生命をも断ったのである。自害は Brutus のストア主義的信条に反するが (V. i. 101—108)、それが最後まで高潔なるローマ人である為の、唯ひとつの手段であったことを思えば、逆説的ながら Brutus は自害によって、自己の信条を最後まで貫き通したという事になる。人間社会にあって、たとえ自らの破滅を招くことになると、自ら至上至高と仰ぐ主義に徹する Brutus の姿に、我々はあらためて人間 Brutus の限界に打たれる。而して Brutus は、人間であるという限りにおいて、やはり人類の威厳の為に闘った高潔なるローマ人といえるのだ。Brutus の判断の誤りは、Brutus 個人の瑕というよりは、むしろ Brutus の住む人間社会の瑕に基いており、Brutus 自身、周囲に欺かれた犠牲者なのである。

所詮、政治は哲学者の思うままに為し得る所にあらず、まして Epicurean のみの関知すべき所でもない。政治とは知識のみの所産でもなく、快樂のみを追求するものでもないからである。政治家は、高邁なる心にも、賤しい心にも、共に無関心であってはならない。Brutus は、人間性の本質に根差した政治の複合的な現実を考えずに、公衆の利益を達成できると信じ、人間としての自己の体験を無視した抽象論を、実際の政治に適用し

ようとしたのである。

人間性の本質を離れ、絶えず空しい幻影に根拠を求め続ける理想主義者 Brutus の歩む道は、Caesar を斃した瞬間より唯ひとつ、自らの血を以って Caesar の死に報いることであった。而して “Caesar, now be still; / I kill'd not thee whth half so good a will.” という Brutus 最後の言葉は、Brutus の高い理念の片鱗をしのばせると同時に、Brutus 自身漸く殺戮⁽²³⁾のもたらす空しい結末を認識したことを示している。Brutus も亦、King John の如く、不変の道德律を受け容れなければならない——

I repent :

There is no sure foundation set on blood,
No certain life achiev'd by others' death.

King John. IV. ii. 103—105

意識的にしろ、無意識的にしろ、Brutus が究極において、この重大な撰理に直面し、自己の死を以ってその周期を全うせねばならぬと自覚した時、この悲劇の政治的主題と、人間性内奥に潜む葛藤とが、複雑に交錯して、Brutus の悲劇は一層深遠な様相を呈し、それは単に政治的レヴェルにおける成否に止らないのである。

斯くして Caesar の魂に漸く安らぎを与えた Brutus は、恰も Caesar が死して不滅の名声を克ち得た如くに、自らの血を贖として、再び人間性本来の美しい調和をとりもどし、真実の自由を得て、勝利者 Octavius や Antony も与り得ぬ⁽²⁴⁾栄光に輝くのである——

I shall have glory by this losing day,
More than Octavius and Mark Antony
By this vile conquest shall attain unto.

V. v. 36—38

一見徒勞に終った Brutus の闘いも、専制を排し、人間性本質の探索と自立とを目差す鑑として、全人類を啓蒙し、天地の精気は Brutus においてみごとに調和融合し、大自然もこの最も高潔なるローマ人を誉称える——「これこそ人間！」と。

His life was gentle, and the elements
So mix'd in him that Nature might stand up
And say to all the world, "This was a man!"

V. v. 73—75

まさしく、「国の運命をにない、一国の精華とあがめられ、流行の鑑、礼儀の手本、あらゆる人の讃美的なりし」Hamlet が (Ham.III.i.161—168), この Brutus にあって既に胎動し始めたと言えないであろうか。斯くして、Brutus に予映された高潔なる Hamlet が、一端懐疑のヴェールに包まれると、極端な自己嫌悪にはしり、冷酷な運命との、内省的な対決となる所に、Brutus から Hamlet へと、Shakespeare の人間性探索の展開を見るのである。

付記：本稿は *Julius Caesar* に関する筆者の試論として「日吉紀要」Vol. 8 (1966年度号) 掲載の拙稿「*Julius Caesar*——複合的悲劇」と共に二部作となるべきものであり、本稿の一部は1967年10月15日、日本シェイクスピア協会主催、第6回シェイクスピア学会(於島根大学)にて発表したものである。

猶 Shakespeare 作品からの引用は、すべて W. J. Graig, *The Complete Works of William Shakespeare*, Oxford, 1905 に拠った。

註

- 1) Chambers, E. K. : *William Shakespeare* Vol. I. Oxford, 1930, pp. 397, 423 ff. 拙稿「*Julius Caesar*——複合的悲劇」日吉紀要 Vol. 8. p. 85.
- 2) 拙稿. Op. cit., pp. 86 ff.
- 3) Caesar についても同様のことがいえう。拙稿. Op. cit., p. 93.
- 4) Knights, L. C. : *Further Explorations*, London, 1965, p. 43.
- 5) Mac. I. iii. 139—142 : My thought, whose murder yet is but fantastical,
/Shakes so my single state of man that function/
Is smother'd in surmise,
and nothing is/
But what is not.

これは Shakespeare の悲劇の主人公に共通な苦悶として重要な意義をもっている。Brutus はこの苦悶の dramatization を極力避けたが、それは *Hamlet* の主題として受けつがれるのである。そしてこれは *Macbeth*, *Othello* においても悲劇の最も重要な要素となっている。

Brutus は、勿論 *Macbeth* の如き悪党ではないが、*Macbeth* 同様怪しい幻か悪夢のような世界にあって己の道を見失うのである。

Granville-Barker, Harley : "From *Henry V* to *Hamlet*", Alexander, Peter (ed.) : *Studies in Shakespeare*, London, 1964, p. 87. Vyvyan, John : *The*

Shakespearean Ethic, London, 1959, p. 21. Holland, N.N. : *The Shakespearean Imagination*, New York, 1964, p. 133.

Knights, L. C. : Op. cit., p. 45.

- 6) “Things bad begun make strong themselves by ill :” Mac. III. ii. 55.)
- 7) Bullough, Geoffrey : *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*, (Vol. v.), London, 1964, p. 90 “Plutarch’s Lives of the Noble Grecians and Romans translated by Sir Thomas North (1579)” — “Marcus Brutus……Whose life we presently wryte, having framed his manners of life by the rules of vertue and studie of Philosophie, and having imployed his wit, which was gentle and constant, in attempting of great things : me thinkes he was rightly made and framed unto vertue.”
- 8) この劇の冒頭より再三繰返し述べられている ritual の主題は遂にその極限に達したと見られよう。
Stirling, Brents : “Or Else were This a Savage Spectacle—Ritual in *Julius Caesar*.” Harbage, Alfred(ed.) : *Shakespeare The Tragedies*, Englewood (N. J.), 1964, pp. 36—38.
- 9) “Let’s carve him as a dish fit for the gods, / Not hew him as a carcass fit for hounds :” (II. i. 173ff.) という Brutus は Caesar を神聖な犠牲としているが、147行にみられる animal (or hunting) imagery は、此処 (III. i. 204—210) で、Antony に受けつがれて Brutus の最も嫌った〈殺戮〉の象徴となることに注目すべきである。そして Capell のいう如く、lethe, a “Term us’d by hunters to signify the blood shed by a deer at its fall, with which it is still a custom to mark those who come in at the death,” (*Variorum Julius Caesar*, p. 155 ; Johnson’s Pelican edition, p. 79.) によって、この hunting imagery は〈殺戮〉の象徴として決定的な意義を帯びている。
本稿 pp.204—206及び209—210
- Bonjour, Adrien : *The Structure of Julius Caesar*, Liverpool, 1958, pp 62 ff.
- 10) Pompey の彫像と Calphurnia の夢に置れる Caesar の像とを結ぶ blood-imagery は Shakespeare の独創と思われる。
Dorsh, T. S.(ed) : *Julius Caesar* (6 ed.) Methuen, 1955, p 55. fn. 76.
Proser, Matthew N. : *The Heroic Image in Five Shakespearean Tragedies*, Princeton, 1965, p. 12.
- 11) Knight, G. Wilson : *The Imperial Theme*, London, 1931, pp. 45 ff. 猶、大山敏子訳 R. D. Altick : 「リチャード二世におけるシェイクスピアの調和の心象」, 東京, 1957, pp. 11—13. 参照。
- 12) 拙稿 Op. cit., p. 90.

- 13) Kittredge, G. L.: (ed.) : *Julius Caesar*, Boston, 1939.

“There is the same antithesis between the murderous violence of their arms and the brotherly kindness of their hearts as in ll. 169—173.”

- 14) 流れる血，流れる涙，流れるような Antony の弁舌と，言葉と演技の心象は一体となって，Caesar を獵犬どもに追いつめられて雄々しく斃れた鹿として強く印象づけ，“many princes” という語の皮肉な響きは決定的となる。猶本稿，註（9）参照。

- 15) Charney, M. : *Shakespeare's Roman Plays*, Harvard Univ., 1963, p. 63.

- 16) Spencer, T. J. B. : “Shakespeare and the Elizabethan Romans”, *Shakespeare Survey* 10, pp. 33—34, 36. Knights, L. C. : Op. cit., p. 52.

Bloom, Allan (with Jaffa, Harry v.) : *Shakespeare's Politics*, New York, 1964, pp. 100—103. は所謂 quarrel scene (IV. iii.) について言及し，“Brutus remains pure by allowing others to perform the immoral acts which are the conditions of his purity” (p. 100) と述べ，更に Portia の死に対する Brutus の態度については，“This sums up Brutus' Stoicism ; it is largely a public display which he uses to deceive others and himself.” (p. 102) と述べている。この外 Brutus の自殺行為等，ストア主義遵奉者としての Brutus には，自ずと限界はあるが，同書も指摘している如く，これらに対しては，指導者としての Brutus の立場も考慮しなければならない。そして本稿の筆者には，この劇の主要人物の信条と行動との矛盾は，いうまでもなく，人間性の限界をあるがままに示す，Shakespeare の優れた技法のあらわれと思えるのである。猶本稿 p. 212参照。

Dowden, Edward : *Shakespeare, A Critical Study of His Mind and Art*, (24 ed.), London, 1875, pp. 291 ff. : “The dramatic self-consistency of the characters created by certain writers is to be noticed : We must notice in the case of Shakespeare, as a piece of higher art, the dramatic inconsistency of his characters.” (p. 292).

- 17) S. Freud の精神分析理論 (Freudism) にいう防衛機制としての合理化 (rationalisation) で，行動の真の動機となる欲求を秘したもっともらしい理由づけを意味する。

- 18) Hoiland, Norman N. : *Psychoanalysis and Shakespeare*, New York, 1964, p. 213. ; Feldman, Harold : “Unconscious Envy in Brutus,” *American Imago*, IX(1952—1953), 307—335 ; (quoted by Holland) ; “Brutus, Virtue, and Will.” *Shakespeare Quarterly*, X (1959), 367—379 ; Tannenbaum, Samuel A. : “Psychoanalytic Gleanings from Shakespeare” *Psyche and Eros*, I (1920), 29—39, (quoted by Holland).

- 19) Sewell, Arthur : *Character and Society in Shakespeare*, Oxford, 1951, pp. 54 ff. ; Stewart, J. I. M. : *Character and Motive in Shakespeare*
- 20) 本稿 註 (16) 参照。
- 21) cf. Ham. V. ii. 232—6 : “there’s a special providence in the fall of a sparrow. / If it be now, ’tis not to come ; if it be not to come, it will be now ; if it be not now, / yet it will come : the readiness is all.”
- 22) Tillyard, E. M. W. : *Shakespeare’s Last Plays*, London, 1938, p. 17 ; 拙稿「*Macbeth—Nature and Order に関する考察*」, 日吉紀要 Vol. 7, p. 60. 註 (11). 併し, 勿論 Brutus の人間性に全く発展がないというわけではない。(本稿 p.213) 参照。更に Brutus も次第に Caesar 的自負心に囚われたという見解や, 所謂 quarrel scene を塚としての, Brutus と Cassius との関係の, 微妙な変動についても注目しなければならない。Proser, Matthew N. : Op. cit., pp. 44 ff. ; Wilson, H. S. : *On the Design of Shakespearian Tragedy*, Toronto, 1957, p. 94 ; Bloom, Allan : Op. cit., pp. 99 ff.
- 23) Traversi, Derek : *Shakespeare The Roman Plays*, London, 1963, p. 75.
- 24) Weilgart, Wolfgang J. : *Shakespeare Psychognostic—Character Evolution and Transformation*, Tokyo 1952, p. 13 ; Dowden, Edward : Op. cit., p. 306.